

## ■まちづくりの視点からみた土木・産業資源としてのダムとは — 柴田いづみ氏

ダムという巨大な土木・産業資産は「まち」「地域」のシンボル、個性化の資源となり得るのかを考えると、その土地におけるまちのDNAは何かを認識しなければならない。ダムにおけるDNAは何か考えたとき、日本人の水に対しての畏敬ではないかと思いついた。それは自然がもたらす癒しであり、親しみを持って、ねじり伏せるのではなく寄り添うことである。自然が自然を制御するとしたら、人間はその手伝いをする形。滝壺にできる波形を美しいと思うのは、水に対して楽しむ、戯れることからくるものではないか。畏敬とは美しいと思う感性であり、それにたくさんの人が共感することでDNAになっていく。

ダムに要求されることは、自然の滝のような美しさに加えて、過去の水害の歴史や必然性を理解してもらおう努力であり、それが自然を改変する人の条件となる。理解があってこそ、愛される土木構造物となり得、人々に引き継がれるDNAとなると思う。まちづくりには、そこに住む人たちが自信と誇りをもつことが非常に大事なこと。その気持ちが子孫に長々と続いていきDNAとなる。



## ■非常時、災害時対応における日本人の危機管理意識 — 豊田政史氏

河川の氾濫や洪水などによる自然災害から被害を最小にとどめるために様々な対策が講じられているが、ひとたび被害が出ると、安全管理に問題があった、危機管理が十分でなかったと思われがちである。東日本大震災では、世界一と評された釜石港の防波堤が壊れたと報道された。あれは意味がなかったと捉われがちだが、津波防波堤がなかったら津波高は13.7m。でもそれがあったことによって8.0mと4割ほど軽減できている。また、防波堤がない場合、津波が防潮堤を超えるまでには28分、ある場合は34分ということである。構造物があることで津波の到達時間を稼ぐことはできるが、それに意味があるかないかは、人間が判断するものと考える。

5年前、外国人と日本人の災害意識に関するアンケートを行った。その結果、水害可能性意識や天気予報による危険予知に関して日本人の得点は高いが、避難対策に対して日本人の得点は外国人に比べてかなり低かった。日本人は行政が守ってくれるから大丈夫というような意識が出ているのではないかと思う。



## ■上下流の連携、情報共有、協力体制の充実へ — 長野市長 加藤久雄氏

沿川市町村の下流域代表として出席している。長野市には一級河川である犀川と千曲川が流れている。河川整備は、上流、下流のバランスが非常に重要で、今後も流域市町村、住民の皆さんと連携をとっていきたいと考えている。

全国で発生している豪雨災害をみると、これまでに経験したことのない豪雨に見舞われていると感じている。信濃川水系では、中野市や館山市の狭窄部の解消に向けた整備など、上下流でのバランスの良い整備が不可欠だと思っはいるが、費用の問題もありなかなか進まない状況。そういう中で、平成18年7月の豪雨の際には、ダムの連携による洪水調節が被害を軽減したと聞き、下流部に住むものとしてダムの存在に頼もしさを感じ、大変ありがたく思っている。

現在、長野市には7基のダムがある。このうち信州新町にある東京電力HDの水内ダムは、今年水利権の更新を迎える。昭和58年に未曾有の災害があったことを踏まえ、今年5月に官民協働による減災

